

そっ たく

啐啄

令和元年8月1日刊行 No.15
編集・発行 大島町教育委員会
教育文化課事務局
TEL04992-2-1453
題字「井島 吉春」

「自立」

教育長 谷 口 浄

自立するってどういうこと？辞書によると「自立とは他の援助や支配を受けずに自分の力で身を立てること。ひとりだち」と説明されています。子どもから大人になっていく段階で、いくつかのパターンが考えられます。最初の自立は、幼少期にかけて「生活習慣的」なことが自分でできることだと思います。次は、高校や大学に進学して親元を離れて生活していく、家を出て巣立ちする時（経済的にはまだまだ親の支援が必要）。三番目は高校、大学を卒業し、就職をして給料を稼ぐようになったときですが、この場合は自分で部屋を借りて自活している場合と、自宅から会社等に通っている場合には違いもできます。一般的には結婚して家庭をもち、自分達だけで生活が出来、会社や地域社会からも信頼され、自分の行動に責任をもてるようになったときが本当に「自立」できたということではないでしょうか。

・エジソンの自立

「自立」についてインターネットで検索すると「生活百科」2017年4月の鈴木結月氏が書かれた中に「エジソンの自立」について目にとまったので紹介します。

『発明王として有名なエジソンは、製材所経営の父と教師の母の間に1847年に生まれたのです。なぜエジソの話をするかということ、エジソンの自立はいつだったかと思ったからです。彼は小学生の頃はLD（学習障害）やADHD（注意欠陥多動性障害）を患っていたという説もあります。学校の授業では、教師の説明を素直に聞かずに屁理屈を連発していたようで、これに怒った教師が彼に向かって「腐れ脳ミソ」と罵倒したというエピソードもあるそうです。

家に帰っても、何でも原理を知りたいという気持ちが強くて、なぜ物は燃えるのかが知りたくて、枯れ葉を燃やしていたら納屋が火事になったそうです。そして学校からも父親からも見放されてしまい、退学処分を受けたのです。このあたりまでは、彼はまだ全く自立できていません。その後、元教師の母親が彼を個人的に教育することになりました。母親は彼が疑問に思ったことを徹底的に理解させ、母親の知識はすべて彼に教えたのでした。その後、彼が科学に興味を持っていることから、家の地下室を彼専用の実験室にして、必要な物を買って与えたのでした。

ここまででは親の依存（お金の支援）があったのです。彼はここで自分の疑問というのは科学の根本のことであることに気付き、母親が知り得ない情報は、自分が図書館に行って学び、発明家としての知識や情報を身に付けていったのでした。

この少年期における母からの巣立ちと、自分で考え知識を吸収して自分の力で研究していくようになった時点が、彼の自立ではないかと考えます。

その後、偉大な発明を次々に行っていたことは、皆さんもご存知と思いますが、子どもから発明家として自立したのは、この少年期の出来事だと思います。

自立とは単に経済的に独立するだけでなく、自分の生き方について自己決定ができることも自立とわたしは考えます。』と結んでいます。

さて、では私自身の自立はいつだったのかと考えてみましたが、よく思い出せません。ただ親からはお前の責任だ！ということは事ある毎に言われました。小学校の中学年のころだったと思いますが、飼っていた犬が高齢で死んでしまいました。この時「お前の責任だぞ」と言われたのです。「死んだ事の責任」ではなく「この後どうするか」を自分で考えさせ、行動させようとしての言葉でした。犬を飼っていたのは

自分なのだから、自分の責任で犬を葬れということなのです。どうしたら良いか考え、畑の隅に埋めてやりました。誰にも手伝ってはもらえませんでした。自分の責任は自分で取れということなのでしょう。そのように教えられました。

大島から他の島しょの子ども達を見て感じることは、高校が設置されている島の子は十八歳まで親元で過ごすことができますが、設置されていない他の島の子は十五歳で親元を離れることとなります。学校でも家庭でも中学卒業までに、日常の生活から将来の自分の方向性について考えさせ指導していると聞きます。この中学三年間をどのように過ごすかは、思春期の子ども達にとって大きな違いも出てくるのではないのでしょうか。

私個人、高校を卒業するまで島の中でのんびりとした生活をしていたのですが、島から出る時、島外から来て勉強をしてくれた大学生に「東京に出たら大変だぞ、まあ頑張れ」と言われたのです。その意味はすぐにはわかりませんでした、いつも私の心の中にありました。大学生の心配する気持ちや激励も含め、色々な事を経験し、そのたびに気づいてほしいという思いだったのでしょうか。のんびりとしていたのでは、「気づく」を感じる、体感することが出来ません。

動物の親は、ある日突然、子どもを巣から追い出し、エサを与えず、自立を促すという行動をとります。子どもははその時からがんばって自分で生きていくしかないのです、一人前に育っていくか、それが出来なければ待っているのは「死」しかないのです。人は大人になる過程で、時期や理由、経験は様々に違っていても、いつかどこかの時期で自立して生きる事を学べる生物です。

私もこの「気づく」ということがもっと早ければ・・・と今頃になって反省然りです。島の子ども達にはこの「気づき」をできるだけ早い時期に持ち「自己実現力」を身につけていってほしいと願っています。

25年後の世界につなげる

教育長職務代理者 山田 三正

私事ですが、母が100歳になりました。1919年大正に生まれ昭和、平成、そして令和元年を生きています。長生きに関しましては周りの皆様のお蔭と感謝しかありません。人生100年の時代到来かとうれしくもあり驚きでもあります。

今、その人生を顧てみますと、本人が「社会」とのかかわりについてどのように感じていたかは定かではありませんが、戦争や自然災害（土砂災害、噴火）など自分自身ではどうにもならない事象に身をおかれた事が見えます。そのときの社会を自分が作ったのか、先達のわざか、神様のわざかはなんともいえません。考えるのは、本人の生き様ではなく人の人生を取り巻く状況です。環境です。戦争、自然災害、所得倍増政策、日本列島改造、離島ブームによる大島の活性、そして現在までまさに四半世紀（25年）ごとに激動の時であったと考えます。

さて、現在の小中学生の25年後の世界はどうなっているのでしょうか。40歳近くになっています。まさに働き手であり世の中の中心です。人と機械の関係。電車や車の自動運転、医療機関の診断など人間の技とAI社会の発展はどのようになっているのでしょうか。

いろいろな予測が散見できます。その中で子ども達の教育について今言われるのが、20年後の世界を考えると、どのように変化しているかわからないので、どんな変化にも対応できる様な子どもを育てましょう。ということです。

学習指導要領も改訂され学校教育も対応を目指しています。世界的視野。プログラミング的思考。英語。道徳など諸々の教育活動。その活動を学校も先生方も子どもも頑張っています。

ここで25年後の世界をつくる道筋を画いているのは今の大人です。少子高齢化問題一つとっても、現在の少子（小中学生）が生活する25年後の更なる高齢化した環境や経済状態を予測し、大島が、日本が今後持続可能となる計画・遂行を考えるのが今の大人です。

子どもたちと一緒にどんな未来を創っていくかです。今どんな価値観を持っているか。何を考えるか。何を残すか。何を続けるか。何を始めるか。これからどんな価値観を創るか。

大島が持続し、安全に、よりいっそう住みやすくなるためにも、今考えることと自分に出来ることをしたいと思います。

しつけという虐待

教育委員 井島吉春

子どもへの虐待が後を絶たない。連日テレビや新聞などでも報道されているが、いつから日本はこんなにも子どもへ酷い仕打ちをする国になってしまったのだろうと考え込んでしまう。

過日、「マルトリートメント」という子どもへの虐待について学ぶ機会があり日本語では「不適切な養育」と訳され子どもの心と身体の健全な成長発達を阻む暴言体罰などの苦痛すべてをマルトリートメントというそうだ。虐待には大きく分けて家庭での虐待とそれ以外に分けることができ、家で受ける虐待は親の言い訳として「しつけ」を持ち出してくる。しつけという体罰である。今日においても体罰を容認する人は意外と多く、体罰に関する意識調査でも「体罰はいかなる場合も認められない」と答えた人は2割。「体罰は認められる場合もある」が約8割を占めているそうだ。現状としては体罰がなぜダメなのかが全く理解されていない。

体罰暴言などの虐待を受けた子どもの脳は場合によって萎縮したり肥大したりするなど物理的に損傷し、その結果いろいろな問題が起こることもあるという。一度傷を負った脳をもとに戻すことは容易ではなく現代医学の研究においても体罰暴言などの虐待は絶対にしつけとは認められない。アメリカなど海外での研究はかなり進んでいるというが日本でも警鐘を鳴らす医師や研究者も多い。

今年の4月より「東京都子供への虐待の防止等に関する条例」が施行された。警察の介入や関係機関の対応も今までより速いそうだが、いくらルールをつくってもそれを実行できなければ意味がない。

もとより、子育ては容易なものではない。親が望んでいるようにならないことも多いし、言うことも聞かない。子どもとはそういうものだと思おうとしても腹が立つこともあろうし怒鳴りたくなるのもわかる。しかし、そこで「しつけ」だと虐待してしまえば犯罪となってしまうのである。自分は虐待などしてない、これはしつけだと子どもを怒鳴りつけ一度怒り出したら止まらなくなってしまう親。いつの間にか子どもを叩いてしまう親。子どもに苦痛を与えても何とも思わない親。しつけという体罰は虐待であり犯罪だということを認識できていない親。そんな親になってはならない。

しつけと称する虐待が無くなるにはどうしたらよいのだろう。平常心を保つには親が心の修養をした方がよいのかもしれない。

ホームタウン

教育委員 岡山 日出子

もう30年以上前のことですが、就職が決まった時に目標にしていたことがありました。それは学生時代に交流のあった外国出身の先生や長く海外に滞在していた先生の話に出てきた場所を訪ねるということでした。国内すらあまり旅行の経験がなかったのですが、自由になる時間とお金があれば行ってみたいと思っていました。（まだ若く現実を理解していませんでした）

その場所は先生方が熱く語っていたそれぞれのホームタウンです。ホームタウンというとスポーツでは『本拠地』として使われていますが、個人では『（生まれ）故郷』とか『住み慣れた町』という意味です。先生方はいかに自分のホームタウンが素晴らしいかをよく話していましたので是非一度訪れてみたいと思ったのです。今考えると先生方のホームタウンに対する思いがそんな気持ちにさせたのかもしれない。

島外で家が伊豆大島だと話すと『行ったことがある！』という人もいますが大抵『どこにあるの？』、『どんなところ？』とか『何があるの？』と尋ねられます。『伊豆半島の東にある伊豆諸島のひとつで本州に一番近い島、三原山という火山を中心に人が住み海や空がきれいで空気が美味しい。春から桜、つつじ、紫陽花、冬には島中に椿の花が咲く美しい島です。』と答えたら何点くらいでしょうか。観光パンフレットそのまま！と叱られそうですね。

先日、会合で一緒になった方が言っていました。椿まつりに来ていた観光客が地元の人にどんな所を観たらいいか聞いたけど『知らない、ほかの人に聞いて』と言われがっかりしていたので自分が知っている大島の椿について教えたら大変喜んでくれたと。その内容を聞いて詳しくに感心したのと同時に長く住む大島にとっても愛着を持っているように感じました。

学校でも島のこと、それぞれの町のこと、三原山のこと等を学ぶ機会があると思います。生まれ育った大島を離れた時、住んでいる大島について尋ねられた時、どんなことを一番伝えたいですか。

オリンピック観戦の思い出

教育委員 山本忠夫

来年 2020 年は東京オリンピックですね。なんと、私にとって 2 回目の東京オリンピックとなります。といっても、1 回目の時は 4 歳（1964 年）だったので全く覚えておりません。だから、初めての経験と言っていていいですね。とても楽しみです。私のオリンピックの記憶で最初に思い出すのは、ミュンヘンオリンピック（1972 年）です。小学校 6 年生の時でした。その大会では、日本男子バレーボールチームが世界一に挑戦するという大会でした。当時も、今と変わらず、ロシアをはじめとする東欧諸国が強豪と言われ、それより遡ること 20 年ほど前には、日本チームは「世界のクズ」と言われ、日本代表でもロシアにいて地方の青年団チームにも負けるほど弱かったらしいです。

その時の松平康隆さんという監督は「負けてたまるか」という精神で、ロシアに勉強に行ったりして必死に練習し、東京オリンピックで銅メダルという成績を残しました。しかし、東洋の魔女と謳われた女子の金メダルの陰に隠れ、あまり評価されなかったようです。その悔しさから「8 年間かけて、必ず金メダルを取る…」と公言してしまったのです。その目標大会がミュンヘンオリンピックでした。その過程には、世間に知られていなかった男子バレーをとにかく宣伝し、マスコミに登場させ、日本中の人に応援してもらう下地をつくる努力からしたそうです。当時、松平監督のことを世界一のプロデューサーと異名があったようです。

その宣伝の筆頭が「ミュンヘンへの道」というテレビアニメをゴールデンタイムに放映させたことです。そしてオリンピックへ向けて「必ず金メダルをとる」というストーリーを日本中に発信しました。そのアニメを小 6 の私は 5 つ上の姉と一緒にテレビにかじりついて見ていました。本当に金メダル取れたらすごいけど…もし取れなかったらどうするんだろう…という不安な気持ちもありました。取れなかったらすごいバッシングを受けるのだろうか…と。

そんな不安をよそに…ミュンヘンオリンピックでは激戦をくぐり抜けて本当に金メダルをとってしまったのです。有言実行とはまさにこのこと。「こんな世界があるんだ、こんなすごい人がいるんだ」とすごく感動し興奮したのを覚えています。その後の私の人生に大きな影響を与えたのは間違いありません。当時、引っ込み思案で自信も全くない子供だったけど、いつか人に夢や希望を与えられるような生き方ができたらいいな…と思うようになりました。また、オリンピックやスポーツには人を感動させる力があるんだな…感じたことは、子供心に今でも鮮明に思い出します。

学校経営連絡会について

毎年度、東京都教育庁大島出張所が主催し、大島町教育委員会との円滑な連携を推進するため、教育委員会の施策等に関して協議・検討し共通理解を図り、もって必要な連携・支援等を行うため、学校経営連絡会が実施されています。この席で教育出張所との連携及び各学校には以下のような取組を含め学校経営をしてほしいとお願いしております。皆様のご理解とご協力をお願いします。

学校経営連絡会 平成 31 年 4 月 22 日 大島町教育委員会

平成 31 年度都教委の教育施策連絡協議会を踏まえて、都教委の教育目標、「教育ビジョン(第 4 次)」基本的な方針として 12 項目、今後 5 ヶ年の施策展開の方向性が示されました。学習指導要領を軸にして展開されていきますが、改定という流れの中で、これまでとは違う時代に合った教育の推進もしていかななくてはなりません。良いものを残し、新たな取り組みに対し、積極的に取り組んでいく必要があります。

大島町としても、「学習指導要領」の改定の方向性を見据え、グローバル社会に遅れることなく、社会に開かれた教育課程という理念と、子どもたちが主体的、対話的で深い学びが実現できるよう、授業改善や学校経営をしていく必要があります。

町の施策や、教育施策大綱、教育目標、教育方針については別に定めている通りですが、大きな課題としては、以下の 12 項目になります。

1. 学力向上については「学力向上推進委員会」を平成 27 年度に立ち上げ 4 年目に入ります。簡単に成果が出るものではないが、目標をもって成果を出していくことが重要です。児童生徒の「基

礎的・基本的な知識の定着」及び「思考力・判断力・表現力の向上」、社会的、職業的自立に必要な、基盤となる能力の確実な定着を図る必要があります。「子ども達が将来の夢の実現」のための支援を、どのようにしていくか、保護者、地域からの期待も高く、注視されています。一丸となった取り組みの推進と成果を出していきたい。

2. 教職員の研修については、現状に甘んずることなく、自らの課題は何かを常に問いながら、「授業改善」に組み込み「授業力」「教師力」「人間力」の向上をもって「学校力」を高めるようお願いしたい。更に、教職員に、常に研修することの重要性を教示し、機会あるごとに、学校内、学校間を超えた研修機会の確保と実践を通して高めていただきたい。

3. 保育園から高校までの連携の促進について、昨年度もお願いをしていますが子ども達は同じ地域の中で、保、小、中、高と進級進学していきます。これまでの連携は、行事等の連携が主でしたが、徐々に教科等でも連携が図られつつあります。更にもう一歩進んだ取り組みをお願いしたい。必要であれば都立高校へお願いの申し入れをします。

4. いじめ・不登校については、全ての児童・生徒をいじめや不登校に向かわせることなく、心の通い合う対人関係を構築し、もし起きてしまった場合、慢性化や重大な事態を防ぐためにも、早期発見、対応が大事であり、問題が重症化にならないための対策を講じていく必要がある。いくつか長期的な事例もみられるが、家庭や担任、学校だけで抱え込まず、共有や相談をしながら、解決に結びつくような取り組みをお願いします。

5. 防災教育については、さまざまな災害の想定と、地域の環境が持つ自然災害の可能性を知り、様々な危険から児童・生徒の安全を確保するための防災教育を推進し、自助、共助の精神を養っていただきたい。また、ジオパークとしての理解や特性を知り、更に郷土愛の醸成を培ってほしいと思います。

6. 特別支援教育については、固定級は、児童生徒の在籍状況により、休学級や開級など、年度によって変動があります。小学校の通級指導学級は、30年度から特別支援教室へ移行しました。中学校は31年度から3校に特別支援教室への移行、設置をしました。教員の巡回指導の形をとっていますが、生徒数により条件がそろえば、それぞれの学校に拠点校として教員の配置が理想と考えています。就学支援委員会や、保育園、教育相談室との連携を図りながら、児童生徒一人ひとりにあった適切な指導、学習ができるようお願いしたい。

7. 教職員の任用、人事については、公募、初異動等により若手教員が増え、偏りや任用のバランスが崩れてきています。「力」のある教員を出来るだけ定着させ、安定した学級運営と学力の向上、学校力の向上につなげたい。

8. 家庭と学校との連携については、これまでも良好な関係を築いていますが、どちらかという、学校に「まかせっぱなし」という家庭も多い。児童、生徒の他に家庭への支援に時間をかけるという事案もある。「家庭力」「地域力」も低下しているといわれていますが、学校からは、学校を中心として、地域の協力を活用しながら、家庭が安心して子どもをあずけ、親が子どもの教育に、学校に関心と信頼を持つような状況を造っていただきたい。

9. 社会教育との連携について、開かれた学校教育を推進していくためにも、学校と地域が連携や理解、協力のもと、子どもの事業への参加促進について、大きな関わり合いがあります。芸術・文化・スポーツ・レクリエーションの各種行事等、児童・生徒の積極的な参加と活躍をお願いしたい。

10. オリンピック・パラリンピック教育の推進。東京都は、実施方針の概要 2 教育すべき人間像として

- ①自己を肯定し、自らの目標をもって、自らのベストを目指す、意欲と態度を備えた人間
- ②スポーツに親しみ、知・徳・体の調和のとれた人間
- ③日本人としての自覚と誇りを持ち、自ら学び行動できる国際感覚を備えた人間
- ④多様性を尊重し、共生社会の実現や国際社会の平和と発展に貢献できる人間の4項目を掲げています。これらはオリンピズムのみならず教育全般に通じているものと思います。東京開催は一生に一度あるかないかという状況にありますのでチャンスと捉え取組んでほしい。

11. 働き方改革について、そもそも国や都が招いた結果であるが。都教委は、主な施策展開として、学校を支える人員体制の確保、在校時間の適正な把握と意識改革の推進、教員業務の見直しと業務改善の推進、部活動の負担の軽減、を掲げています。実態を把握し、改善に努める。

12. 2020 年度小学校のプログラミング教育の導入に加え、グローバルに活躍する人材を育成する教育の中で、中学校英語スピーキングテストを実施する方針を示しています。導入は 2021 年度以降としていますが、都立高校入学者選抜にテスト結果を活用予定の計画であり、平成 31 年度プレテスト(一部抽出校、第 3 学年 8,000 人)、平成 32 年度確認プレテスト(都内公立中第 3 学年全生徒、80,000 人)となっています。早期に準備、対応していく必要がある。

以上、校長先生方の強いリーダーシップのもと学校経営を宜しくお願い申し上げます。

教育委員会カレンダー 9月～3月

月	日	内 容	場 所
9	8	ジュニアスポーツフェスティバル	都立大島高等学校体育館等
10	13	大島町体育祭レクリエーション大会 予備日 10月14日(月)	つばき小学校グラウンド
	25	就学時健診	開発総合センター他
11	3	大島町体育祭 駅伝競走大会	大島全域
12	10	大島町立小中学校連合音楽会	未定
	26	雪国体験学習(12月29日まで予定)	新潟県上越市大島区(予定)
1	11	成人式	開発総合センター2階大集会室
	17	大島町立小中学校連合作品展 (21日まで予定)	未定
2	1	大島町体育祭 野球大会(小学生の部)	差木地地域センターグラウンド
	中旬	大島町文化祭 芸能大会	開発総合センター2階大集会室
3	上旬	大島町文化祭 作品展	開発総合センター

(柔剣道大会につきましては調整中)

※啐啄(そったく)とは

鳥の卵が孵化しようとするとき、殻の中で雛鳥が外に出ようとして内からコツコツ殻をたたく音を「啐」といい、母鳥がその孵化の瞬間を悟り、殻の外をコツコツつき破ることを「啄」といいます。この啐と啄の呼吸が合うとうまく殻が割れ、丈夫な雛が誕生しますが、どちらか早すぎても遅すぎても良い雛は生まれません。教育も教わる側の生徒と教える側の先生が、啐・啄同時である事が理想であり、依って大島町教育委員会便りを『啐啄』と名づけました。